

第二節 潛水艦以外ノ補助艦

第一款 米國ノ提案

米國ノ提案中補助艦ニ關スルモノハ左ノ如シ

補助水上戦闘艦船

十四、補助水上戦闘艦船トハ巡洋艦(巡洋戦艦ヲ除ク)嚮導駆逐艦駆逐艦其他次項ニ於テ特ニ除外セルモノヲ除キタル水上用各種艦ヲ謂フ

十五、現存スル淺喫水砲艦、第十六項ニ於テ特記スル如キ三千噸以下ノ非装甲水上艦、燃料船、補給船、母艦、工作船、曳船、掃海船及商船ヨリ直チニ轉用シ得ル船舶ハ此協定ノ條項ヨリ除外セルモノトス

十六、排水量三千噸越速力十五節ヲ超過シ又五時砲四門以上ヲ裝備スル新補助戦闘艦船ハ海軍軍備制限ニ關スル本協定ノ範圍外トシテ建造スルヲ得ス

十七、各國ニ許容スヘキ巡洋艦、嚮導駆逐艦ノ總噸數ヲ左記ノ如ク提議ス

合衆國	四十五萬噸
英國	四十五萬噸
日本	二十七萬噸

但シ本協定加入國ニシテ一九二一年十一月十一日現有ノ補助水上戦闘艦船總噸數カ前記噸數ヲ超過スル場合ニ於テモ補充ヲ開始スル迄ハ超過噸數ヲ廢棄スルヲ要セス而シテ補充開始時期ニ於テハ各國ノ有スル補助戦闘艦船ノ總噸數ヲ爰ニ規定スル許容限度迄縮減スヘキモノトス

新建造ノ制限

十八、(イ) 一九二一年十一月十一日迄ニ龍骨据付ヲ了シタル總補助水上戦闘艦船ハ之カ建造ヲ繼續スルヲ得
(ロ) 本協定期間ニ於テハ後條ニ規定スル通補充噸數ニ對スル場合ノ外新補助水上戦闘艦船ヲ建造スルヲ得ス

但シ補助水上戦闘艦船總噸數前記規定ニ達セサル國ハ許容限度迄是等艦船ヲ建造スルヲ得
舊艦ノ廢棄

十九、補助水上戦闘艦船ハ合意ノ方法ニ從ヒ廢棄セラルヘシ

第二款 補助艦ノ噸數及備砲制限問題

第一項 フルノ要求提出ニ到ルマテ

補助艦問題ハ常ニ潛水艦問題ト共ニ議論セラレタルヲ以テ既ニ第一節ニ述ヘタル處ノ外補助艦ノ噸數制限ヲ除イテハ爰ニ持ニ述フヘキモノナキモ便宜ノ爲ニ簡單ニ議事經過ヲ記セハ左ノ如シ

一、第四回軍備制限總委員會ニ於テ議長「ヒューズ」ハ佛國ニ潛水艦及補助艦ニ關スル要求噸數ヲ申出ツルコトヲ求メタルニ佛國「ドゥボン」中將ハ自下政府ニ照會中ナレハトテ決定的數字ヲ提出シ難キヲ述ヘ潛水艦全廢問題ノ討論ヨリ始ムヘキコトヲ提議ス

二、第五回第六回第七回及第八回ノ軍備制限總委員會ニ於テハ潛水艦問題ヲ論シタルヲ以テ補助艦ニ付テ特ニ述フヘキモノナシ

三、第九回軍備制限總委員會ニ於テ佛國全權「サロー」ハ潛水艦九萬噸ト共ニ補助艦三十三萬噸ヲ要求ス

英國ハ佛國ノ右要求ヲ聞キテ英國ハ潛水艦ニ對抗スル爲ニ補助艦ニ關スル如何ナル制限ヲモ受諾スルコトヲ得スト宣言ス

一、第九回軍備制限總委員會ニ於テ佛國カ潛水艦九萬噸ヲ要求シ之ニ對シテ英國ハ補助艦ノ無制限ヲ宣言シ補助艦並潛水艦ニ付テハ總噸數制限ノ協定ヲ成立セシムルコト不可能ナリタルヲ見テ

議長「ヒューズ」(Hughes) ハ

「既ニ論セラレタルモノヲ綜合スルニ佛國全權ノ述ヘタル基礎ニ依リテハ協定成立シ難キモノノ如シ「バルフォア」

(Balfour) ハ英國カ潛水艦ニ對スル爲補助艦ノ完全ナル自由ヲ留保スルコトヲ述ヘシカ此ノ中ニ主力艦ノ自由ヲ含マナルハ勿論補助艦ノ假名ノ下ニ主力艦ト認メラルヘキモノヲ建造スルコトモナキモノト解ス

補助艦ノ總噸數ノ制限ニ關スル協定不成立トスレハ爰ニ各補助艦ノ噸數ニ付テ制限ヲ定ムル爲審議アリ度シ余ハ之カ爲ニ次ノ決議ヲ採用セラレムコトヲ望ム」トテ次ノ如ク決議案ヲ提出ス「主力艦及航空母艦ヲ除クノ外一萬噸ヲ超過スル艦船ヲ將來建造スルコトナカルヘシ此ノ種ノ艦船ハ口徑八時ヲ超過スル大砲ヲ搭載スルコトナカルヘシ」*「No ship other than the capital ship or aircraft carrier hereafter built shall exceed a total tonnage displacement of 10,000 tons, and no gun shall be carried by any such ship with a calibre in excess of 8 inches.'*

二、右議長ノ提案ノ後埴原、「サロー」(Servant) 「バルフォア」(Balfour) 諸氏ハ各自夫々日本、佛國、英國ノ爲ニ潛水艦及補助艦ニ關スル態度ニ付前款ニ述ヘタルカ如ク辯シ未タ議長ノ提議ヲ討論スルニ至ラサリシカ其ノ後ヲ受ケテ

「リー」卿 (Lord Lee) 立チテ議長ノ提案ニ賛成シテ

「余ハ議長ノ提案ニ賛成ス諸君カ之ヲ反対スベカラサルモノト看做サムコトヲ希望ス主力艦以外ノ艦船ノ大サニ制限ヲ設クルハ主力艦制限ノ協定ニ必然附屬シテナサルヘキモノナリ然ラサレハ假裝セル主力艦ニ外ナラナル補助艦カ建造セラニ主力艦ト同様ニ高價ナル軍備ノ競争ヲ新ニ生スルニ至ラム余ハ既ニ本會議ニ參加スル諸國ノ海軍専門家、間ニ協議アリテ主力艦及航空母艦以外ノ艦船ニアリテハ一萬噸(或ハ協定セル他ノ噸數)ヲ以テ最大限度トナスコトニ合意アリシモノト思考ス又大砲ノ口徑ヲ八時ニ制限スルコトニ關シテモ合意アリタリト思考ス英國ニテハ七時半以上ノ大砲ヲ有セ超ユル大砲ヲ搭載スルコトヲ得ス」

ス佛國モ略同様ニシテ七、六時以上ノ大砲ヲ有セスト思考ス故ニ此ノ程度ヲ以テ適當ナル大サト思考スルモ他ニ理由アリテ八時トナサムトスルナラハ之ニ對シ英國ハ反対セス余ハ武裝制限ハ航空母艦ニモ適用スル必要アリト信ス然ラサレハ主力艦ヲ制限スルモ事實上航空裝置ノ加ハレル主力艦ニ外ナラサル軍艦カ建造セラレ其ノ目的ヲ達シ難シ余ハ爰ニ航空母艦ノ制限噸數ヲ論セムトハ欲セサルモ決議ハ左ノ如ク訂正シテ然ルヘシト論シ修正案ヲ提出ス

「主力艦及航空母艦ヲ除キ將來建造セラルヘキ軍艦ハ一萬噸ヲ超ユルコトナカル可シ、主力艦以外ノ軍艦ハ口徑八時ヲ超ユル大砲ヲ搭載スルコトヲ得ス」

「No ship of war other than a capital ship or aircraft carrier hereafter built shall exceed a total tonnage displacement of 10,000 tons, and no gun shall be carried by any such ship other than a capital ship with a calibre in excess of 8 inches.

四、議長「ヒューズ」(Hughes) ハ米國政府ニ於テハ修正ニ異議ナキ旨述ヘシカ埴原氏ヨリ討論ノ續行ハ當日午後又ハ翌朝ニ致サレ度シトノ希望アリ、次回ハ十二月二十八日(水曜日)午後三時三十分再會ノ事ニ決シ第九回軍備制限委員會ヲ終ル

第三項 第十回軍備制限總委員會

提出
決議案

「ド・ボン」

一、議長「ヒューズ」(Hughes) 氏ハ「リー」卿 (Lord Lee) ハ右提議中噸數制限ニ關スル部分ハ理由ナキモノナリト前提シ主力艦ト巡洋艦ト
トヲ噸數ニ依リテ區別スルハ不當ニシテ右區別ハ之ヲ搭載砲ノ口徑ニノミ求ムヘキヲ主張ス、殊ニ巡洋艦ハ殖民地ト本國トノ間ノ遠洋航海ニ使用セラルコト多ク、其ノ爲ニ搭載力ヲ増スニハ一萬噸ヲ超ユルモノヲ建造スル必要アル場合ヲ生スヘシト論ス

lors,

「ド・ボン」
トヲ噸數ニ依リテ區別スルハ不當ニシテ右區別ハ之ヲ搭載砲ノ口徑ニノミ求ムヘキヲ主張ス、殊ニ巡洋艦ハ殖民地ト本國トノ間ノ遠洋航海ニ使用セラルコト多ク、其ノ爲ニ搭載力ヲ増スニハ一萬噸ヲ超ユルモノヲ建造スル必要アル場合

ヲ生スヘシト論ス

航空母艦
武裝制限
提案

三、「リー」卿 (Lord Lee) ハ之ニ對シ本會議ノ目的カ單ニ軍備制限ノミニ存セスシテ 軍備節約ニモ存スルコトヲ指摘シ、且一萬噸ヲ超過スル巡洋艦ハ現在制處ノ國ニテモ建造セラレ居ラス此際之ヲ制限スルハ時宜ニ適シタルモノニ非セヤト述フ

四、議長ハ目下米國ノ建造中ノ巡洋艦ハ七千五百噸ナルコト及佛國輕巡洋艦ハ八千噸ナルコトヲ述ヘ「リー」卿ノ所說ヲ支持シ且直ニ本件ノ討議ニ入ルヘキヤ否ヤヲ諸ル

五、「アクトン」中將 (Vice-Admiral Acton) ハ伊國代表ハ本提案ニ別段異議ナキモ噸數ノ制限ニ就キ目下請訓中ナリト述フ

六、埴原次官ハ日本代表ニ關スル限り本提案殊ニ備砲ノ點ニ就ケハ異論ナキモ加藤男爵カ次回ノ本委員會ニ出席スヘキヲ以テ成ルヘク本件討議ノ延期ヲ希望スル旨陳述ス

第四項 第十三回軍備制限總委員會

一、先ツ議長ハ「ロード、リー」ノ修正ヲ加ヘタル案(第十回總委員會參照)ヲ朗讀ス

伊委員ア
クトン中將
加藤全權
一、加藤全權ハ補助艦噸數及ヒ武裝制限ニ關スル「ヒューズ」氏案ニ對シ余ハ之ヲ經巡洋艦ト解釋シ其排水量一萬噸砲八吋以下ニ同意ス但シ高速力大型商船ハ戰時巡洋艦ニ改造シ得ヘキヲ以テ「ヒューズ」氏原案第三十節ノ主義ニ依リ何等カノ規定ヲ設クルニ非サレハ輕巡洋艦ニ關スル本制限ハ無意味トナル惧アリト述フ

二、議長ハ商船ノ武裝制限ニ關シテハ充分ナル考慮ヲ拂フヘシ尙ホ補助艦制限ニ關シテハ元來補助巡洋艦ヲ目標シテ規定セントシタル處「ロード、リー」ノ修正ニ依リ主力艦及航空母艦ヲ除ク一切ノ補助艦艇ニ適用セラルルモノナリ故ニ本規定ノ適用ヲ受ケサルモノハ(一)主力艦(二)航空母艦(三)現存ノ軍艦ナリト說明シテ次テ本規定ニ對スル「アクトン」(Acton) 中將ノ承認アリタル後議長ハ目下請訓中ナル佛國全權ヲ除キ全部同意シタル旨ヲ宣シ散會セリ

第五章 太平洋島嶼防備問題

第一節 假協定成立迄

第一款 防備問題論議ノ端緒

政府ノ訓
令
一、帝國政府ハ太平洋ニ於ケル諸島ノ防備問題ニ關シ華府會議ニ於ケル帝國全權ニ對シ其出發ニ臨ミテ左ノ如ク訓令セリ
「太平洋諸島防備ノ撤廢若ハ制限ニ關シテハ平和維持上ノ見地ヨリ適當ノ機會ニ於テ帝國ヨリ之ヲ提議シ少クモ現狀維持ノ程度ニ協定ヲ成立スルコトニ努メラレタシ」

然ルニ比率問題ニ關シ加藤全權カ十一月二十三日左ノ四案ヲ掲ケテ政府ニ請訓スル處アリシニ對シ (第二章主力艦問題
第一節第二款第二項註ノ一ノ一、參照)

一、我提案ヲ固執スル事

二、割合ヲ十對六、五前後トシテ陸奥ヲ加フル事

三、割合ヲ十對六トシ陸奥ヲ加フル事

四、米國提案通リトスル事

政府ハ左ノ如ク訓シ來リ防備問題ヲ以テ六割承諾ノ條件トスルノ方針ヲトリタリ

「御來示ノ如ク海軍制限問題ニ關シ英米特ニ米國ト衝突ヲ避クル事必要ナルニ付飽ク迄和衷的態度ヲ持シ 我提案ヲ貫徹スル様全幅ノ御努力アリタク若シ已ムヲ得サル場合ニ於テモ貴案第二、十對六、五ニシテ之ニ協定スル様努メラレ度ク閣下ノ御盡力ニ拘ラス尙西國ノ情勢ト大局ノ利益ノ爲讓歩ノ已ムヲ得サル事態トナリ貴案第三ニ落着カサルヲ得サル場合ニハ太平洋防備ノ減縮又ハ少クトモ現狀維持ノ了解ヲ確保シ以テ米國艦隊ノ太平洋ニ於ケル集中活動力ヲ減殺シ之ト